

本語（薩摩弁）それ自体を主題にしていたことである。村山氏のこうした約三〇年間に亘る研究については、既に別稿で具体的かつ詳細に跡づけたので、ここでは、触れないことにする。

さて、流石の村山氏を以ってしても、とり組み乍ら解明し得なかった問題があった。それは、ゴンザの出身地と出港地の解明である。即ち、前者について、村山氏は、ゴンザの言語の特徴に着目して、何度か推定を試みている。まず、「現在の鹿児島附近のことば」と推定して、ほどなく撤回し、その後、「鹿児島県長島又はそれに近い地方の方言」と推定し直したのであった。こうした「言語的特徴」に着目した出身地の推定については、国語学者柴田武氏の厳しい批判がある。即ち、同氏は、村山氏が、漂流民三之助の子タターリノフの「レクシコン」中にある日本語の使用者の出身地について下した推定―当初、山形県の庄内方言としたものの、後に、下北半島佐井村の方言と改めた―に関連して、次の指摘をしている。「レクシコン」の言語が佐井村方言であって、それ以外のものではないことは、言語以外の歴史的・文化的情報を待たなければならなかった。一般に言語だけから、その使用者の出身地を推定するのは、地方といった広い単位でならばともかく、狭い地点（村・町）にまでしぼるのは容易なことではないと思う」（『国語学』六八、八九ページ）。次に、村山氏の、ゴンザの出港地に関する推定は、こうである。「ゴンザの郷里が長島又はその近くであるとすれば、米ノ津か阿久根か京泊から出帆したのではあるまいか」。しかし、この推定は、余りにも素朴か

つ安易である。出港地を推定するためには、薩摩藩の海運体制及び航路に基づく検討が不可欠であるからである。従って、ゴンザの出身地と出港の問題は、依然、解明すべき課題として、我々の前に横たわっているのである（一九九六・一・十五）。

※ 脱稿後、更に、二点を確認したので、「昭和中期までの研究」に追加しておく。

一九二八年（昭和三）

平岡雅英稿「日本ロシア学史考」（其三）（東洋）昭和三年五月号）

一九四二年（昭和十七）

エリ・エル・ベルグ著（小場有米訳）「カムチャッカ発見とベールリング探険」（龍吟社）

（一九九六年一月十六日 受理）

むすび

―「村山以前」のゴンザ研究と村山氏による研究との比較―

「村山以前」のゴンザ研究二点については、第二章から第四章で詳述した。そこで、こうした「村山以前」の研究を、村山氏による研究と比較してみるのが、ここの目的である。

まず、「村山以前」におけるゴンザ研究について、その特徴を指摘しつつ、その上で、そうした研究の到達点を総括してみる。

「村山以前」のゴンザ研究は、各研究者が、「漂流史」とか「外国関係史」とか「ロシアにおける日本語研究」といった、それぞれの関心の枠内で、ゴンザに言及したに過ぎないという特徴をもっている。従って、二一点の研究のうち、実に一七点までがこういう特徴を具えていた。この点、異色なのが吉町義雄氏の研究四点であって、それは、専ら、ゴンザに焦点を当てていたのである。こうして、ゴンザは、研究者の区々の関心に依じて、他の項目と並列的に論じられていたのである。しかし、ゴンザ研究の観点即ちゴンザの生涯と業績の全明的解明に立って、「村山以前」の研究を全体的に総合してみると、村山以前の研究がもつ到達点の高さには一警を禁じ得ないものがある。即ち、漂流・漂着の事実またボグダーノフの指導下での辞典等の編纂執筆の事実は、既に、明治期に明らかになっていた。大正期の研究は、ほぼ、明治期と同様のレベルで推移するが、昭和期になると、研究水準は一段の飛躍を見せ、まず、

奥平氏の「ギョッチェンゲン大学アッシュコレクションが、ゴンザ遺稿のコピー二点を所蔵している」との報告が現われ、後には、吉町義雄氏による、パラス辞典初版本が収録している日本語の若干がゴンザに由来している旨の、ゴンザを主題とする研究（論文等三、学会報告二）が、遂に登場するに至るのである。吉町氏の研究は、村山七郎氏が一九六三年に発表した・パラス辞典中の日本語をテーマにした論文と、ほぼ同一の結論を示していた。従って、吉町氏の研究は、「村山以前」の研究における白眉であって、ゴンザ研究の歴史上、無視することのできない重みをもっている。しかし、こうした研究が、村山七郎氏の輝かしい業績の蔭に埋もれていたのであった。

それでは、村山七郎氏によるゴンザ研究は、一体、どのような特徴をもっているのか。まず指摘しなければならないのは、村山氏の研究が、同氏以前の研究とは、「継承」関係を一切もっていないという事実である。このことは、同氏の学問上の経歴から明らかである。同氏の言語学研究は、外務書記生として勤務していた、しかも、第二次大戦さなかのドイツで、始まった。従って、同氏は、日本におけるゴンザ研究を承知し得る客観的状况に置かれていなかったのである。こうした、自分以前のゴンザ研究とは関係がない状態は、帰国後一九六五年頃まで、続いたようである。氏は、このことを、同年に刊行した著書「漂流民の言語」二二六ページで、自認している。次の特徴は、村山氏のゴンザ研究が、ゴンザの生涯と業績を全面的かつ系統的に紹介し、しかも、ゴンザの日

一九五五年（昭和三〇）九月二五日、吉町氏は、戦前未発表の論文と同じタイトルに、副題「二〇〇年前の鹿児島方言」を添えた報告を、第五回西日本国語・国文学会研究発表会で行う（於鹿児島大学文学部）。この報告の要旨は、後に、同学会同年度「会報」一五一頁に掲載され、更に、同氏の著書「北狄和語考」五〇八頁に収録された。引用しておく。「ロシア女帝エカチェリーナ [Ekaterina] 二世の為に編纂された『露都創刊欽定萬国寄語』 [Linguarum Totius Orbis Vocabularia Comparativa; Augustus Simae Cura Collecta, Petropoli:] 欧亜部一七八六年及一七八九年第二巻の一六一番目には日本語二百数十箇が含まれている。是は難破してシベリアへ漂流した奥羽地方の漁夫の方言単語である事は夙に知られていた。自分は此の奇観辞典を東京の前東洋文庫で閲覧して西南九州方言の最大特徴標識たるカ語尾形容詞数個を発見して、即ち是は漂流漁夫の内に該地方人の混在した証拠なりとして昭和十三年五月『方言』第八巻第二号（終刊号）と同十五年五月『言語研究』第五号の關係箇所へ指摘発表した。此の九州訛は右辞典の再版本たる [Sravnite Inyi slovar'ysex Jazykov i narecij azbycnoti u povjadku raspolozennyi Sankt-Peterburg] 欧亜米一七九〇—一七九一年四巻の日本語にも表れ、此の事も自分は前記発表で触れておいた。右の九州訛を今回は更に局限精査して二百年前の鹿児島方言と見做せないかと提案した所が主題である。音声上からはフォドゲ（仏）、オカダ（妻）は奥羽式だが、シエ（丈）、ブンド（葡萄）、フェ（蠅）、ケンクワ（喧嘩）は奥九

的となろう。語法上からは二段活用動詞ヂェクル（出来る）があり、カ語尾形容詞はウレシカ（嬉しい）、スクナカ（少ない）、ヤカマシカ（喧しい）、マルカ（円い）、ユカ（良い）があり、是は南九州的となる。語彙は西日本のオナゴ（女）、コトイ（牡牛）の外オラブ（叫ぶ）は西南武（四国中国九州）となり、キュデ（兄弟）、ゴジェムコ（嫁入）が鹿語となる。又再版本第四巻末附録の日本語に追加されたチヨ（息子）はムスメジョ（娘御）の語尾かと云う教示が発表直後に南九州の先学同僚からあつた」。つまり、この報告は未発表論文を要約したものであるが、注目すべきは、報告の時期である。即ち、吉町氏は、村山氏の前記論文の発表に先立つこと八年の時点で、同論文と同一の見解を公開の場で明らかにしていたのであつた。従つて、吉町義雄氏の一連の研究は、村山以前の時代におけるゴンザ研究中の白眉と評価して然るべきであろう。換言すれば、吉町氏は、ゴンザ研究の先駆者だったのである。なお、村山七郎氏は、一九六三年の前記論文を、二年後に刊行した著書「漂流民の言語」に収録した際、同論文の末尾に、以下のように注記していた。「著者の不明のため、吉町義雄氏が、九州方言的要素の存在について、『方言』誌第八巻第二号一九三三ページ、『言語研究』第五号六〇ページに論じ、またそれが鹿児島方言であろうとの推定を昭和三〇年度西日本国語国文学会で発表されていることに気づかなかつた」。

元)年九月十八日享年四十余歳で、後者は Демьян Породнев と改名一七三九(元文四)年十二月一五日享年二十一歳で何れも露都で夭折、死面は石膏型に取られて今も伝わっている。若年の権蔵の方は天才肌でやがて露語にも熟したらしく、又日本語教師に任命されたが、併し元来七一歳の時日本を離れた為殆んど日本文字を知らず、日本語は彼にとつて支那語同様に非常に困難であつたと云う。

そして一七一〇(宝永七)年第二回漂着本邦漁夫サニマと露国婦人との間に西北利亜で生れ、後露都大学附属図書館次長になつた Андрей Иванович Богданов (一七〇七-一七六八) 監修下に、彼は露国最初(未刊)の日本語文典・会話・辞書を作製、是等稿本は、今日尚彼地秘庫に保存されてある。サニマの生国やその混血児の日本語も勿論問題になるが、記録を尊重する限り享保漂流隼人を無視する事は出来ない。二・三分の疑は残しつつも矢張特に二才権三の国手形が奥羽の方言と共に寄語に上されたと考へる方が穏やかであろう。尤も鹿兒島語的特異性が余り掴めないのが物足りないが、是は今日でも該地方人が余りのお国訛は抑へる場合、北九州語の衣を以て通すのは幾多実証が存するのである。氏は、こう記述した後に、寄語改修本の「南北僻遠卑語」について、「其儘保たれてある」「田舎言葉は殆んど上方振に改められてある中にも、九州方言の特異標識は、全く姿を消してつたと言つてよい有様である」と指摘する。こうして、吉野氏は、パラス編萬国寄語中の約三〇〇語の日本語について、「二・三分の疑は残しつ

つも矢張特に二才権三の国手形が奥羽の方言と共に：上されたと考へる方が穏やかであろう」との結論を得たのであつた。

後に、村山氏は、一九六三年(昭和三八)に発表した論文「パラス(P.S. Pallas)編『欽定全世界言語比較辞典』の日本語について」で、パラス辞典中の三〇〇前後の「日本語単語を筆者は最近、東洋文庫所蔵本(O—I—D—34)によつてしらべる機会をもつた。この調査の結果、本州最北端の方言、つまり青森県下北半島佐井村附近の方言と九州最南部の方言、つまり薩摩方言とがそこに混合的に代表されていることが明らかになつたのである。この事實は、これまで日本でもロシア(ソ連)でも、またその他の外国でも気づかれなかつたと思われるから、それを報告することは多少なりと学問的価値を持つことと思う」と書く。しかし、吉野氏が、未発表の論文の中で、既に、パラス辞典における奥羽方言と薩摩方言の混在つまりほぼ二〇年後の村山論文と同一の結論を示していたという事實は、吉野氏の名譽のため、この際確認しておきたい。とはいえ、村山氏がそうした発見を学界に報告した時点では、吉野論文は、未だ発表されていなかったのである。従つて、「第一発見者は自分である」との村山氏の誇らしい記述には、無理からぬ面があるといえるだろう。なお、村山論文は、更に、「パラス辞典の日本語の部とギョツチンゲン大テアッシュ・コレクシヨシヨシ露和辞典原稿との關係は、あまり遠くない將來において筆者によつて明らかにされるだろう」と述べていた。こうした問題について、吉野氏は、何等言及していなかつたのである。

については、「第三部のH(羅写字Nに相当)から初版本に無い語約七〇が殖えている上に、挿入写真で解る通り第四部六一四頁には、一七九一年聖彼得堡に到着して露語を話した日本国伊勢国白子村出生の日本商人幸大夫が日本語の以下の単語を正確な発音と意味と共に示した」とある下に露日対訳語彙が各頁二欄宛印刷され：語序も語数も全く初版本と同じ、又最後の数詞の所も錢勘定に改められた外は少しも異ならない」とする。なお、伊勢の光大夫が、寄語改修本の日本語につき一定の協力を行ったことについて、桂川甫周著「北槎聞畧」(光大夫等の帰国後、桂川甫周が、将早家斎の命をうけて、彼等のロシアにおける見聞につき訊問を行い、それを編纂したもの)巻之九の雑載が、次のように記している。「此学校に万国寄語の書あり。部を分ちて日本語をも載せたり。何れも語の末に、之事々と書す。たとへば鼻を鼻の事、耳を耳の事と、いふがごとし。これは以前此方より漂流せし者共に問て記せしよし。かの問たる時にそれは何の事、かれはこの事と答へたるを、直に之事までも一語と心得へてかく記しおきしなるべし。この書を光大夫に刪定すべきよしを望まれける故、日々に通ひて六日にて卒業す。書中の語多く南部辺の言葉にて、しかも下賤の語多し。古来皇朝より彼地に漂流せし事此度共に四度なり。以前の三度はみな南部の人なりしとぞ。日本通事は今イルコッカに三人あり。今度光大夫等を送り来しエゴロモイルコッカの人にて言語は南部訛のしかも誤り伝へたる事ども多かりし故、初のほどは聞へざる事のみなりしとぞ。…」(岩波文庫版二四一―二四二頁)。

氏は、次いで、収録されている日本語について、音韻・語法・語彙上の特質を指摘した上で、次のように述べる。「更に以上抄出語に即して地方性を少し立入って考察して見ると、音声上からはフォドゲ(仏)、オガダ(妻)は東北式であり、シユ(丈)、ブンド(葡萄)、フエ(蠅)、ケンクワ(喧嘩)は奥九的とならう。語法上からは二段活用動詞デェクル(出来る)はともかく、ウレシカ(嬉しい)、スクナカ(少い)、ヤカマシカ(喧しい)、マルカ(円い)、ユカ(善い)のカ語尾形容詞は西南(厳密には対馬を除く西・南九州)標識である。語彙上から軽々に論断出来ぬが、シンド(辛い)は近畿式、オナゴ(女)やコトイ(牡牛)は西日本式、オラブ(叫ぶ)は西国(四国・中国・九州)式。キュデ(兄弟)やゴジエムエ(嫁入)が先ず鹿語的ともならうか。是等日本語が北奥訛多き事は夙に上方人幸大夫によって指摘されてをり、今更珍しくないが、紛れもない西国風も混入する事は是迄全く知られなかった」。そして、氏は、発見した「寄語へのこうした西国風日本語の混入」を、ゴンザと関係づけ、次のように記述する。「抑々十八世紀の交元祿年間大阪生れ商人伝兵衛(ニコッコロ大帝治下に最初の日本語学校教師となつた)を始とする沿海州難破本邦人の多くは東北人であつて、九州人とさされているのは十八世紀では一七二九(享保十四)年第三回漂着の薩摩出身漁夫ソーザ(又はソーゾー)及びゴンザ(又ゴンゾー)二人だけである。兩人共女帝 V. H. H. P. の命により一七三四(享保十九)年基督教に改宗し、前者は $\text{K. Y. Z. B. M. A. S. H. Y. J. P. H. T.}$ と改名して一七三六(元文

一九四三年（昭和十八）、前掲田保橋著の増訂版が刊行された（刀江書院）。ゴンザに関する記述には変化がない。

一九四四年（昭和十九）、前出した平岡氏の著書が、「日露交渉史話」と改題の上で再版された（筑摩書房）。しかし、ゴンザ関係の記述は変わっていない。

さて、これから、「村山以前」の時代におけるゴンザ研究の掉尾を飾る吉町義雄氏の研究について、記述してみたい。まず一つは、論文「露都創刊欽定萬国寄語の日本語——二〇〇年前の奥九方言」であり、他は、同氏が一九五五年（昭和三十）、第五回西日本国語国文学会研究発表会で行った・論文と同じタイトルの報告である。

前者の論文は、一九六六年（昭和四一）、村山七郎氏の人類学会報告に三年遅れて、「九州大学文学部創立四十周年記念論文集」に発表され、後一九七七年（昭和五二）、著書「北狄和語考」（笠間書院）に収録されたものである。しかし、氏は、この論文末尾の後書で、戦争末期に執筆し乍ら公表できなかったいきさつを、次のように書いている。「以上は東京大学言語学教授小倉進平博士還暦記念論集へ捧げたものが三省堂関係の印刷所からその初版刷（昭和十九年四月十一日工務課、二五日整版課、二七日植字課の三個紫印付）になって帰って来て（当時朱筆を加へ）、今迄手許に保留されていたものを殆んど元の儘（畧体漢字と不徹底仮名遣の外は横書形式も）世に出すのである。添附挿入凸版十頁も当初の意図である。再校迄受取って返送して中止となり、爾來廿年間目の目を見

ずにいた訳である」。従って、この論文は村山以前の研究業績として扱いたい、この章で紹介することにする。

氏は、この論文で、パラス編「露都創刊欽定萬国寄語」初版本には、「三分の疑は残しつつも矢張特に二才^{にせ}権三の国手形が奥羽の方言と共に：上されたと考へる方が穏やかであろう」と結論づけているが、それに先立って、寄語の初版本・改修本の刊行由来及び寄語が収録する日本語について、語数・音韻・語法・語彙上の特質及び抄出語の地方性の観点から、分析を加えている。要約してみよう。まず、寄語刊行の由来について、この「十八世紀末露都創刊萬国寄語」には、言語に興味をもつ女帝 Екатерина 二世が自ら計画し原稿を作成したものを、「是が整理を独乙の Peter Simon Pallas に委嘱した」初版本（第一部一七八七年刊、第二部一七八九年刊）と Феодоръ Мвановъ-Вилья Диковичъ-Де-Мидиеро^フが編纂に当った改修本（第一部一七九〇年、第二部・第三部・第四部一七九一年）が存在している旨を指摘する。次に、この寄語所収の日本語については、まず、語数を紹介する。即ち、初版本については、寄語の序文が、そうした日本語の典拠につき、「日本語：を我々は時々難船して西伯利亞東岸へ漂着した日本人達によって出来し露都学士院に有する語彙豊富な写本辞典から取った」と記しているのを紹介しつつ、「二部を通じて計二二二語を数へ、是に第二部末で第一六六番にずれている数詞一二語が加わると総計二三四語となる」と述べている。他方、氏は、改修本の語数

「多々良散語」を発表した（「方言」第八卷第二号、春陽堂）。氏は、「九州の方言」という個所で次のように書いている。「：是は伯林児パラス〔Peter Simon Pallas〕（一七四一年）編纂『欽定萬国寄語』（Linguarum Totius Orbis Vocabularia Comparativa: Augustis Simae Cura Collecta）一七八六—九九年露都刊初版第一部二卷本所収露字綴物類順日本語約三百に北奥南部卑語含入の事は新村出先生御力作「伊勢漂流氏の事蹟」（大正十四年十一月『続南蛮広記』所収）にも詳しいが、昭和十二年五月東洋文庫本（初版のみ）で筑紫式語尾形容詞数個を偶然発見したのは僻遠紙上方言学者が唯一の殊勲と言へようか」。つまり、氏は、パラス編の「露都創刊萬寄語」（初版一七八七年）が収録している約三〇〇の日本語の中には、新村氏が指摘する「北奥南部卑語」だけでなく、「筑紫式語尾形容詞数個」も含まれており、それを偶然発見したと述べているのである。今や、吉町氏は、村山七郎氏が一九六三年の論文「パラス編『欽定全世界言語比較辞典』の日本語について」で行う指摘に、早くもたどりつこうとしているのである。なお、「筑紫式語尾形容詞」という表現は、後に、「享保薩摩隼人」「二才^{にせ}権三の国手形」とか、「二〇〇年前の薩摩方言」といった、一層精密なものに代えられてゆく。

一九三九年（昭和十四）、前掲バルトリド著が再刊された（生活社）。凡例は、その理由を、初版刊行以後、「事変と共に一般の東亜に対する関心が昂り、本書を要求する者日に多きに鑑み」と、説明している。

一九四〇年（昭和十五）、吉町義雄氏が、論文「歐人刊行日本言葉集

覚書」（上）を発表した（「言語研究」第五号、彼に、「北狄和語考」笠間書院に収録）。この論文は、前記「多々良散語」で言及したパラス編「露都創刊萬国寄語」中の日本語について、より詳細な記述を行っている。即ち、氏は、まず、寄語の初版本について、「内容は凡て露語文字もて記されおり『神』『空』『父』『母』以下各品詞に亘る二七三箇を物類順に各露語見出しの下に欧露巴一四九・亜細亜五一言語を羅列比較してある。日本語は一六一番毎に必ず出てるが、是は奥羽地方（南部藩）卑語と共に九州西南部（筑前半部、筑後、壱岐、肥前、薩摩・大隅全部、日向一部）『か』語尾形容詞が数個拾へるのである」と指摘し、また、増訂本については、「日本語は数詞も混入され各地方訛を依然保たれてゐるが、恰も一七九一年二月露都到着の伊勢漂流民光大夫の影響に由るか、第三・第四部には初版に見当らぬ方言味無き約七〇語が植えてゐる外に、初版含入語頭Φ（発音はF）語彙約四〇語が再版では変らずX（発音はHに当てた）が植えてゐるのが面白い。而も第四部卷末（六一四—八頁）には幸大夫が示した是には少なくとも西国訛は全然姿を見せぬ日本語が初版と同じ物類順語数の露日二八五対訳で添へてある事は他国語には行われぬ扱ひとして特筆せねばならぬ」と書いている。なお、こうしたパラス辞典に収録されている日本語に関する分析は、その後、一九六六年（昭和四一）に発表した「露都創刊欽定萬国寄語の日本語—二〇〇年前の奥九方言」では一層の展開をみせ、遂に、薩摩漂流民のゴンザと結びついてゆくことになる。

全部掠奪された。シュティニコフはこの罪によって後に投獄の上処刑せられた。二人の日本人は一七三四年にペテルブルグへ送られ、女帝アンナ・ヨアノウナ・アハナ・イオノフナに引見され、正教に転宗した。キリスト教に転宗するに当り、宗蔵はクジマ・シュリツ・ス・ツバマ・シ・ツェロ、権蔵はデミヤン・ポモルツェク・デムリヤン・ポモド・デフといふ名を与えられた。この二人の日本人を使って日本語を教へることになり、兵卒の子弟を選んでこの二人の日本人に教育を委ねた。学校の監督したのは学士院図書館長の補佐アドレイ・ボグダーノフ・アハドレフ・ボグダノフで、この日本人達もロシア語学習の指導を受けた。ボグダーノフは、日本人を『絶対に畏怖』させて置き、彼等とその生徒達が誠心その義務を果すやう努力することを命ぜられてゐた。シュリツツ（宗蔵）は一七三六年四三歳で死に、パモルツェフ（権蔵）も一七三九年二一歳で死んだ。この天才的な青年は、当時の人の批判によれば、上手にロシア語で自分の意見を述べ、美事に日本語を教へたといふことである。学士院の図書館には彼がボグダーノフの指導下に編纂した教科書の原稿が残つてゐる。それは『単語及び会話』：“*Словарь русских и французских словъ*” 『文法』：“*Грамматика*” 及び『図示した世界』：“*Orbis Pictus in luce et in umbra*” といふ書名の選文集である。日本語の原文はすべてロシア文字で記されてゐて、その序文には、十一歳で母国を離れたパモルツェフは『ピン（支那）文字と同じように難しい』日本文字を知らなかつ

たと釈明してある。この二人の日本人が死んだ後、学士院の委嘱によつて美術家のコンラッド・オスネル・ス・エフ・オ・コ・エフ・オ・コ・エフが蠟で彼等のデスマスクを造つたが、これは今日も学士院の人種学博物館に保有されてゐる。

デミヤン・パモルツェフの夭折は日本語学校へ致命的な打撃を与へた。生徒だった兵卒の子供達は、先生なしに自分で日本語の研究を続け、これを他人へも教へねばならなかつた。数年後（一七四五年）、カムチャツカから難船した日本人を又も学校へ送つて来たし、その後も兩三度こんなことがあつたが、その大部分は単なる漁夫で、これに成功的な教育活動を期待することは困難であつた。パモルツェフ青年のやうな傑出した人物は彼等の中にもうゐなかつた。学校は一七五三年迄ペテルブルグに置いてあり、その後も一八一六年まではイルクーツクで依然として存続した。しかし、この時代にはもう日本語の達者な者は養成されなかつたし、ロシア東洋学史に何等の足跡をも残してゐない」（三九〇―三九二頁）。

この年、前出の播磨氏が、一二年前に発表した論文と同じ表題をもつ論文『露国に於ける日本語学校の沿革』を、前後二編に分けて発表する（『月刊ロシア』第三巻第四号・第五号、日蘇通信社）。しかし、最初の論文との間には、内容上の相違は殆んどない。

一九三八年（昭和十三）、吉町義雄氏（新村出氏門下の言語学者。後に九州大学名誉教授。一九九四年没）が、『霜硯』という筆名で、論文

年」と記され、第六枚目には「マンズリン或はマンチュール語対西蔵語辞典」と記されてゐるが目録編纂者の指摘せる如く誤りである一七六八年の時日もこのコピーの作製された年を現してゐるのではないかと思われる。それは私の見るところではゴンザ・ボグダーノフの著書と同じくするやうに見ゆるからで、勿論詳しい対比は後日に期せらるべきで、このギョツチンゲン大学本とレニングラード学士院本といずれが原本であるかの決定も慎重になされねばならぬ。本書は二部より成立し、第一部は四〇章にわたれた露日語。この末尾の数字表には日本文字の使用がある。第二部は露日対話書で一五章より成つてゐる〔アツシユ一四八号〕

〔五〕「露日辞典」菊版・三九二枚第一枚目に露独両語にて「スラヴ日本語辞典・一七八八」と記載される。前者と同じく著書名は欠ける。日本語を使用せず露字のみである〔アツシユ一四九号〕

これは、村山氏以前における、アツシユコレクシヨンが所蔵するゴンザの遺稿との出会いに関する、大変に貴重な報告である。しかも、奥平氏が、既に、ゴンザ・ボグダーノフの手書本を、レニングラードで参看してゐたことを、記述から読みとれるのである。

一九三四年（昭和九）、平岡雅英氏（翻譯著述業。一九四二年没）が、著書「維新前後の日本とロシア」を刊行した（ナウカ）。序文には、「わが国におけるロシア語の学習または日本とロシアの文化的接触交渉のあと……についてときどき雑誌などに載せたものを骨子とし、それに改訂増

補を加へ、日本とロシアとの一般的関係を述べた」「彼我の文献を比較対照してやや事実を明らかにし、北洋辺境地方の探險やわが漂流人の事蹟をしらべ、日露人の最初の接触から維新前後までの事項をやや系統的に纏めてみた」とあり、第六章「ロシアの日本語研究とわが漂流氏」が、クラシエニンニコフの著書に依拠しつつ、サニマ、ソーズ及びゴンゾーについて畧述し、更に、外交志稿の關係箇所及びプーシユキンの手記中にある覚書「カムチャツカの出来事」についても言及する。

一九三七年（昭和十二）、外務省調査部第三課が、前掲したバルトリドの著書を「欧州殊に露西亜における東洋研究史」のタイトルで、翻譯刊行した。凡例は刊行目的を次のように書いている。「本書はそのテーマにおいて既にユニークであるのみならず、殊にロシア人の東洋經畧史と東洋研究史に全体の半ばを割いている關係上、我国東洋学徒のみならず政治外交の實際家に教ふるところ決して些少ならざること信ずる。

敢えて上梓する所以である。」さて、ゴンザ關係の記述は、第一編「西ヨーロッパにおける東洋研究史」第十三章の日本語学校の項に出てくる。これはバルトリド著の本邦初訳出であるから、引用しておく。「一七三六年になつて日本語学校が学士院に附屬して始めて設立せられた。一七二九年、カムチャツカ沿岸に近い所で又も二隻の日本船が難破し、岸に上つた者も五百人長アンドレイ・シユティニコフ Андрей Штиглиц 一隊に襲撃されて宗藏 Соваと権藏 Гонзаの二人を除く全部が鑿殺され、この二人も奴隸にせられて、日本人の財産は

外に出づる事なき日本人が、ペテルブルグに常住し、しかも日本語教授の任に当れる事は、一種の奇譚としてヨーロッパ人の注意を惹くに充分であった。一七二〇年ペートル大帝の勅命により、清聖祖康熙帝に大使として派遣せられたリヨフ・ワシリエウイチ・イスマイロフ (L'ev Vasilevitch Izmailov) に従ひ、北京に抵れる英国医士ジョン・ベル (John Bell of Antermony) 亦ペテルブルグ滞在中、ゴンザ事タミヤンに会して、遭難顛末を尋ね、某旅行記中に記載して居る。」というのである。つまり、同氏は、ジョンベルの旅行記「Travels from St. Peterburg in Russia, to divers Parts of Asia」(一七六四年、ロンドン) 第一巻二二二頁から二二三頁に、ゴンザとの会見記事が載っていると指摘しているのである。そこで、国会図書館所蔵の同書(蔵書番号GE84-16)に当たってみると、田保橋氏が指摘した箇所は、一七二〇年における北京行の記事があるにすぎず、また、念のため第二巻の同一ページも検索してみたが、こちらは一七二一年の記事であった。そもそも、このベルの二巻本旅行記は、主として、一七一五年から一七二二年に至る記事から成っていて、第二巻の約七〇頁だけが、一七三七年から翌三八年の記事を載せているのである。従って、一体、田保橋氏は、ベルの旅行記のどこに依拠しつつ、記述したのだろうか(なお、この旅行記に依拠して、ベルとゴンザの出会いについて言及するのは、田保橋氏だけではなく、後年即ち一九九一年(平成三)、前記の木崎良平氏も、前掲書二八頁で、同様の指摘をしている。しかも、トボリスクで勤務してい

たベルは、一七三一年、ペテルブルグへの移送の途中で同地に滞在したゴンザ・ソウザの二人と出会い、そのことを旅行記に記録したと書いているのである)。

一九三二年(昭和七)、安藤次郎氏著「和魯年表稿本」が、非売品として刊行された。同氏は、序文で、「本書は徳川時代に於ける日本と露西亜の交渉を漫然と記したるもの」「其材料の大半は乏しき吾が蒐集を基となす」「杜撰脱漏多からんも識者の高教を仰ぐ」と述べた上で、元禄七年(西暦一六九四)から慶応三年(一八六七)に至る日露交渉を年表としてまとめ、享保十四年(西一七二九)の個所で、「七月、薩摩人漂到東察加二人赴露都不帰(外交)」と記している。これは、「外交志稿」の年表に依拠したものである。

この年には、更に、奥平武彦氏(京城帝大教授。一九四三年没)が、論文「ギョツチンゲン大学図書館の日露支関係文書」を発表した(満鉄各図書館報「書香」第四五号)。氏は、「一九二九年一月伯林なるプロシア国立図書館に於て全国各地の図書館目録を調ぶるうち、偶々ギョツチンゲン大学図書館のアツシユ文庫に入露日本人に関係する稿本類が西伯利関係の夥しいマニユスクリプトとともに蔵められてゐることを知り、この年の七月一七日午前大学図書館を訪ねた。…」と指摘した上で、閲覧した日本関係の文書五点について詳細に記述する。ここでは、ゴンザ関係の二点に関する部分を紹介しておく。「(四)『露日語彙及び日露対話書』菊版六七枚第二枚目に独逸語にて『露西亜満州語辞典一七六八

- 一九二九年（昭和四）
- ⑧ 枅内曾次郎著「増修洋人日本探険年表」（前掲年表の増修公刊本）
- 一九三〇年（昭和五）
- ⑨ 田保橋潔著「近代日本外国関係史」
- 一九三二年（昭和七）
- ⑩ 安藤次郎著「和魯年表稿本」
- ⑪ 奥平武彦稿「ギョッチンゲン大学図書館の日露支関係文書」
- 一九三四年（昭和九）
- ⑫ 平岡雅英著「維新前後の日本とロシア」
- 一九三七年（昭和十二）
- ⑬ 播磨植吉稿「露国に於ける日本語学校の沿革」
- ⑭ バルトリド著外務省調査部訳「欧州殊に露西亜における東洋研究史」
- 一九三八年（昭和十三）
- ⑮ 霜硯（吉町義雄の筆名）稿「多々良散語」
- 一九三九年（昭和十四）
- ⑯ 前掲バルトリド著の再版
- 一九四〇年（昭和十五）
- ⑰ 吉町義雄稿「欧人刊行日本語集覚書」（上）
- 一九四三年（昭和十八）
- ⑱ 前掲田保橋著の増訂版

一九四四年（昭和十九）

- ⑲ 前掲平岡著の改題再刊
- ⑳ 吉町義雄稿「露都創刊欽定万国寄語の日本語―二〇〇年前の奥九方言」（但し未公表）
- 一九五五年（昭和三十）
- ㉑ 吉町義雄の学会報告

まず、一九二九年（昭和四）、枅内曾次郎氏が、「増修洋人日本探険年表」を刊行した（岩波書店）。これは、同氏が、一九〇二年（明治四十二）に私刊した年表の増修公刊本である。本書におけるゴンザの記述については、明治期の個所で、既に紹介をすませている。

一九三〇年（昭和五）、田保橋潔氏（京城帝大教授）が、「近代日本外国関係史」を刊行した（刀江書院）。これは、二〇章から成るが、三分の一に当る七章を日露関係史の記述にさき、ゴンザ（権左？）とソーザ（惣左？）を、第三章「日露関係の起源」で登場させている。即ち、「第三回の日本船漂着は一七二九年の事に属し、ミュラーのロシア史集成、及びクラシエニンニコフのカムチャトカ史にその詳細を伝えて居る。両書の記事を総合するに……と書いている。しかし、クラシエニンニコフの記述については、既に紹介済みであるから、ここでは反復は避けたい。さて、田保橋氏のゴンザに関する記述の中には、読む者を興奮させる個所がある。即ち、「十七世紀以来厳密なる鎖国主義を執り、敢て海

な出来事の短い筋書がある。その手控へは一六九四年から一七四〇年迄のカムチャツカ史を含み、一八三四年より五年にかけてプーシユキンが編纂したのだ。詩人は一七八六年に再版を出したところのステパン・ペトローウィツチ・クラシエニンニコフ (Степан Петрович Крашенинников 1713~55) とさぶ学士院会員が書いた『カムチャツカ誌』Описание земли Камчаткиといふ本と、種々な記録を材料としたらしい。彼はこれを詩に作ろうと思つて集めたのであろうが、実現せずに死んで了つた」と述べ、プーシユキン覚書第六八に収録されているクラシエニンニコフの記述を紹介している。つまり、この論文によると、ペトログラードに於ける最初の日本人とはゴンザとソーザのことであり、しかも、彼等はプーシユキンが詩想を練るための素材だったというのである。

同年、亀田次郎氏（国語学者。一九四四年没）が、論文「露国創刊日露辞典及其編纂著」を発表した（「国学院雑誌」第二九卷第十一号）。この論文は、一八五七年（安政四）に、ペテルブルグで出版された、ゴシケーヴィツチ編纂日本人橋耕齋補助の日露辞典「和魯通言比考」について、その内容を詳細に紹介することを主題にしているが、その前提として、「露西亜に於ける日本語研究」に触れ、そうした枠組の中で、ボグダーノフとソーゾウ（宗蔵？）ゴンゾー（権蔵？）に言及している。要点のみ引用しておく。「：此ゴンゾ即ポモルツエフは前にいったサニマの子ボグダーノフ監修の下に日本語の入門というやうなもの五冊、即文

典・辞典・会話等を編纂した。此等の書類が露西亜で出来た最初の日本語学書で、手書の儘ペテルブルグ学士会院附属亜細亜博物館に保存されてゐる。此等の語学書中第一に出来たのは辞典で、一〇四頁、次は会話で七〇頁、次に日本文典三八頁、その外露和新辞典がある。これもボグダーノフの筆に疑ひ無く三八二頁の大冊である。最後に又露和会話八〇頁のものがあつた。此等は何れも一七三六年から三九年（元文元年―四年）の間の編纂である。斯る教師斯る状態の下でこの短日月に此程の仕事をしたボグダーノフの精力は感服に値するのである。：」。こうした内容から判断する限り、氏は、八杉論文に依拠して執筆した模様である。

四 昭和中期までのゴンザ研究

ここでは、昭和の初めから、村山七郎氏が日本人類学会で報告を行つた一九六三年（昭和三八）までの時期における、ゴンザ研究が対象である。この時期の研究は延べ十四点実質十一點にのぼる。研究の多くは、明治期・大正期と同様に、「漂流史」「ロシアにおける日本語研究」といった観点のものであるが、村山七郎氏の研究に接続しうる研究が、遂に現われるに至つたのである。それは、ゴンザの日本語（薩摩弁）を分析しようとする吉町義雄氏の研究であつて、同氏の業績は、村山氏以前における研究の頂点といつても過言ではないであろう。この時期の研究として、以下のものがある。

此処で死んだ。此人等の事は有名な植物学者で、カムチャトカ地方の記事を書いたクラシェニンニコフの記事に由つて、其墓所死去の年代其死後の事までが伝はつてゐて、ノワコウスキ氏が其「日本とロシア」の中に全文を引いてゐる。本文に訳出したのは即ち其である。こうして、堀氏は、前掲したノヴァコフスキーの著書が引用している、クラシェニンニコフのゴンザに関する記述を、全文訳出する。この記述は、後に、村山七郎氏が、一九六四年、論文「薩摩漂流民ゴンザ（権左）の事蹟」の中で紹介することになるが、堀氏は、既に一九一八年の時点で、我国の学界に報告していたのであった。

一九二二年（大正一一）、播磨栖吉氏（第一次大戦末期から十月革命期にかけ、ペトログラードに滞在した「時事新報」特派員。晩年はロシア史研究に従事。一九五二年没）が、論文「露国に於ける日本語学校の沿革」を発表した（『史学雑誌』第三三編第一〇号）。同氏は、この論文を、「我が日本語研究の目的でロシアに於て初めて日本語学校が創設されたのは遠くピョートル（Peter）大帝の時代に属する」という文章で書き初め、一七〇五年（宝永二）以降一八一六年（文化一三）に至る日本語学校の歴史と同校の教師となつた伝兵衛以下の漂流民について、詳述する。氏は、勿論、「ソーゾ」及び「ゴンゾ」についても言及している。しかし、ここでは、全文の引用は避け、記述の末尾だけを紹介しておく。「…ポモルツェフ（ゴンゾ）は前記サニマの子ボグダーノフ監修の下に三種の日本語書籍を編輯した。『単語集並に日常会話』『日本文

典』『日本文集』これである。この三書は出版されなかつたが其稿本は今日尚ほペテルブルグ大学附属図書館に蔵されてゐるといふ。これ等の稿本の序文によると、ゴンゾは十一才の時に日本を離れたので殆んど日本の文字を知つてゐなかつた。日本語は彼にとつて支那語同様に非常に困難であつたと言つてゐる。これ等の書籍は何れもロシア語のアルファベットを以て記され、日本字では記されてゐない。ゴンゾは天才肌の少年であつて露語に精通し日本語の教授が巧みであつたといふ。なお、同氏は論文の執筆に利用した文献については、一切明記していない。

一九二三年（大正一一）、ワノーフスキー氏（当時早稲田大学勤務）が、論文「ペトログラードに於ける最初の日本人」（三宅賢氏訳）を発表した（片上伸監修「ロシア研究」創刊号、春陽堂）。氏は、まず、「早稲田大学の図書館に一八世紀の興味ある図解付きの手記がある。一七九六年の辰年に十五人の日本人がオホーツクを通りイルクーツクへ行つた旅行の事が書いてある。…然し日本人のシベリア行きは、これが最初のものではない。これより一〇〇年程以前からこの様な事があつたのだ。一七世紀の末に日本船が暴風に流されてカムチャツカの岸に流れ着きロシアの国境に入つた事があり、一八世紀の初めに同じ様な事情に依つて一人の日本人はカムチャツカを通りモスクワに行き、二人はペトログラードに到つた。この日本人こそ確かにロシアに入つた最初の日本人といふべきだ」と指摘した上で、「プーシユキンの詩の題材中に『カムチャツカの出来事』と云ふ手控へがある。其中にはこの地の移民に關した種々

本語学校は終に実用上の効益を与へた。即「ゴンザ」は一七三九年十二月に没して日本人の教師は無くなったが学生等は「アンドレイ」の指導の下に自習を継続し、一七四〇年にその学生の二名「ピョートル・シエナヌイキン」及「アンドレイ・フェニヨフ」は「シパンベルグ」の極東旅行に随行し日本沿岸を訪問して通訳の労を取ったのである。彼等が帰朝するや政府は益該語学実習の必要を認めて西比里亜の「ヤクツク」に第二の日本語学校を開くに至ったのである。

八杉氏は、ゴンザの師ボグダーノフを、漂流民サニマとロシア人との間に出来た子と扱えた上で、そのボグダーノフによる日本語学習書編纂の事実を、極めて詳細に紹介している。そうした記述の内容から判断して、クラシエニンニコフやミュレルの著作が資料でないことは確実である。論文の前編に「自分も在露中探ねて見た」という記述があるから、恐らく、在露中に入手した資料に依拠しているのであろう。

三 大正期におけるゴンザ研究

大正期には、四点の研究が発表されている。

一九一八年（大正七）

④堀竹雄稿「元禄享保年間ロシアに於ける日本人」

一九二二年（大正十一）

⑤播磨権吉稿「露国に於ける日本語学校の沿革」

一九二三年（大正十二）

⑥ワノーフスキー稿（三宅賢訳）「ペトログラードに於ける最初の日本人」

⑦亀田次郎稿「露国創刊日露辞典及其編纂著」

まず、一九一八年（大正七）、堀竹雄氏（後に中央大学名誉教授。一九五〇年没）が、論文「元禄享保年間ロシアに於ける日本人」を発表した（『史学雑誌』第二九編第一二二号）。同氏は、「太平洋沿岸を航行する船舶が、航海中暴風雨の為に難船して、カムチャトカ・アレウト諸島に漂着することは、天候と海流の為め極めて有勝の事で、敢て元禄享保年間に始まった事ではあるまいが、ロシアが此地方を領することになって以来、日本に対する注意を怠らなかつたので、遂に生を全くして本国に帰還する機会を得、前代の漂流民の如く、全く何処にも知れず死に果てるのを免れたものがあり、又ロシア本国に召されて何かの用を呈してゐたものがある」と述べた上で、元禄年間の漂流民デンベイと宝永年間のサニマをとり上げ、前者につき、「モスコウ司法省文書館所蔵シベリア役所報告書」を利用して、詳細を紹介を行う。次に、同氏は、「享保年中ロシアに赴き遂に彼地で歿くなった二人の我国人」について言及する。即ち、「其後一七二九年（享保一四年）に漂着した薩摩の人、ソーザ、ゴンザがベテルブルグに召されアンナイワノウナ帝から優遇されて、

著第二卷一八一頁を挙げているので、国会図書館所蔵の同書に当たってみて、ノルデンシヨルドの記述を要約していることを知った。

次いで、八杉貞利氏（ロシア語学者。後に東京外語名誉教授。一九六六年没）が、論文「十八世紀に於る露西亜の東洋語研究」を発表した（『東洋時報』第一二四号・第一二七号）。この論文は前後二編から成る。八杉氏は、まず、前編で、「露国に於る日本語研究はいかに始まったか」というに、『カムチャツカ』を征服して露国の領土が日本と相對するに至って、遠き考への彼得は必ず日本と事を有する日あるべきことを慮り、日本語学習の必要を認めてその教授の基を開いたのである」とした上で、露国における「日本語学習所」の開設と漂流民出身の日本語教師「デムベイ」及びその助手「サニマ」について、記述する。さて、氏は、後編で、ゴンザとソウザに言及する。氏の記述は、外交志稿や栃内氏とは大いに異なり、ゴンザの漂流漂着の事実よりは、ロシア語学者らしく、ゴンザの従事した日本語教育に重点を置いている。つまり、こうした関心の向け方が、後に、昭和中期における吉町義雄氏の研究につながっていくことになる。そこで、少々長くなるが、関係部分を全文引用してみる。「彼得大帝が聖彼得堡府に建設した日本語学校はその後継者の時代にも継続し、教授の主義はやはり彼得の時代とかはらず、教師も前同様の方法で採用した。即一七三五年には枢密院命令で前の『デムベイ』及『サニマ』同様の『カムチャツカ』沿岸への漂流民『ソザ』（宗左か）及『ゴンザ』（権左か）の二人が教師に任命された。両人は一七二九年に漂

着し一七三一年に聖府へ送られここで露語を学び、洗礼を受けて『ソザ』は『クジマ・シユレツ』という露西亜の姓名を受け、『ゴンザ』は『デミヤン・ポモルツエフ』という姓名を取った。その時『ソザ』は四十歳『ゴンザ』は十七歳であった。これから兩人に就て種々の出来事の記録が残っている。即兩人食料として一人一日拾錢を与へられたこと、枢密院の管轄から学士会院に移されたこと、次で各一日五錢ずつの俸給を増加されたこと、彼等が日本語を忘れぬため兩人を一所に起臥せしめ之に監督をつけたこと、学生にはやはり兵卒の士弟を命じ、その数は二人から五人であったことなどの記録がある。『ソザ』は一七三六年に没しその後『ゴンザ』一人教師として年俸一〇〇円を支給された。それで当初の『デムベイ』の子にあたる『アンドレイ・ボグダーノフ』（前出）が日本語学校の主管として熱心其業に従事し、日本語の入門というやうなものを五冊即文辞典会話などを編纂した。これらの書類は即露西亜で出来た第一の日本語学書で手書のまま学士会院図書館に保存されてゐる。これらの書中第一に出来たのは辞典で一〇四頁ほど、次は会話で七〇頁、それから日本文典が三八頁ある。その外に露和新辞典（ブツ）五も『アンドレイ』の筆に疑ひ無く、之は三八二頁の大冊、最後に又た露和会話の八十頁ほどのものがある。これらは何れも一七三六年から三九年の間に編纂せられたもので、かかる教師かかる状態の下にこの短日月にこれほどの仕事をした『アンドレイ』の精力は賞すべきものである。これらの書籍は元より需要の少なかったために印刷されるに至らなかつたけれど、併し日

米国人所著曰「本人漂流記」。更に、年表二八九頁には、「**西十四（漂）** 七月、薩摩人漂到東察加、二人赴露都、不帰」という記事が出てくる。ゴンザの漂流漂着の事実は、こういう形で、わが国の文献に現われたのであった。では、こうした記述の典拠は何であろうか。凡例が「引用書ハ国史以下諸家ノ伝記ヲ参取シテ出所ヲ注シ」としているので、ゴンザに関する記述の末尾にある「米国人所著日本人漂流記」に着目せざるを得ないが、米国人とは誰のことか。この点、凡例から、「本省御雇亜米利加人『セパルト』と判明する。では、セパルトとは何者か。ユネスコ東アジア文化研究センター編「資料御雇外国人」（小学館、一九七五年）二八四頁によると、Schepard, Eli. T. の、外交志稿の編集当時、外務省万国公法顧問を勤めていた人物である。ところで、シェパード氏は、一体、ゴンザ漂着の事実を、どのようにして知ったのだろうか。先ほど引用した記述の中にある「若島丸」という船名が、問題を解く鍵だと考えている。彼は、恐らく、ミュレルが書いた「ロシア史集成」に依拠したのではないだろうか。というのは、ミュレルは、ゴンザの乗った船の名前を「ワカシワ丸」と記述しているからである。この点、クラシエニンニコフは、「フアヤンク丸」としている（なお、木崎良平氏は、「漂流民とロシア」〔中公新書、一九九二年刊〕で、外交志稿のこうした記述を引用紹介しているものの、何故か、「若島丸」を「若宮丸」と誤って引用し、その上で、この「若宮丸は間違いであろう」と書いている。これは、同氏の誤読に由来する「独り相撲」といべきだろう）。

その後、一九〇九年（明治四十二）に、二つの研究が相次いで発表された。まず、**栃内曾次郎氏**（岩手県出身。後に、海軍大将・貴族院議員。一九三二年没）が、「洋人日本探険年表」を私刊し、少数同好の士に頒布する。残念乍ら、今のところ、この年表については未見であるので、岩波書店が、一九二九年（昭和四）に刊行した、同年表の「増修版」から、ゴンザ関係の記述を引用してみよう。まず、五七頁に「一七二九 七月薩摩ノ船アバチャ湾ノ南方ニ於テ勘察加海岸ニ難破ス」（原文は横書ニ引用者）とあり、更に、五八頁で詳述している。「一七二九 七月十七人ヲ載セ絹・米・紙ヲ積ミタル日本船アバチャ湾ノ南方勘察加ニ難破ス此ノ附近若干ノ土人トコサックノ一団アリ其ノ長ヲ Andreas Schinnikov ト云フ初ハ日本人ノ進物ヲ受ケテ好意ヲ示セシモ後遭難地ヲ撤退シ而シテ日本人カ伝馬船ニテ海岸ニ沿ヒ漕行スルヲ見ルヤ Schinnikov ハ bydar（露ノ小船）ヲ以テ之ヲ追跡シ遂ニ二人ヲ剩シテ悉ク日本人ヲ殺戮セリ其ノ目的ハ難破船ノ貨物ヲ掠奪シ船ヲ毀チテ其ノ釘ヲ得ントスルニ在リキ Schinnikov ハ此ノ死罪に依リ法ニ問ハレ死刑ニ処セラルル生存日本人二人ハ勘察加堡ニ連レ行カレ後露邦ニ送ラレ語学ノ教師ト為リ一七三六一一七三九間ニ死セリ二人共薩摩人ニシテ年長ナルヲ Sasa ト呼ビ商人ニシテ他ヲ Gonsa ト呼ビ按針ノ子ナリト云フ船ハ大阪ニ仕向ケラレタルモノニシテ難風ニ逢ヒ漂流六ヶ月悲惨ノ最後ヲ遂ケタルモノナリ」。外交志稿と比較して、大変に詳細な記述である。栃内氏は、こうした記述の典拠として、前掲したノルデンシヨルド

Вский, С.И.)の著書「Япония и Россия」(一九一八年)、『ズナメンスキー(Знаменский, С.В.)の著書「В по-
йсках Японии; историй русских геог-
рафических открытий и мореходства в
Тихом океане」(一九二九年)及びドストエフスキー
(Dostojewsky, M.)の論文「Russlands Vordringen zum Stillen
Ocean und seine erste Berührung mit Japan」(一九三十年)で、利
用されることになる。このままで、ロシアにおけるゴンザ研究の概観で
ある(詳細については、別稿を準備している)。

次は、わが国におけるゴンザ研究の歴史である。それは、「村山以前
の時代」「村山時代」そして「村山以後の時代」に区分できるが、本稿
は、「村山以前の時代」を対象とする。「村山以前の時代」は、一八八四
年(明治十七)の「外交志稿」からはじまり、一九五五年(昭和三十)
の吉町義雄氏の学会報告に至る時代で、ロシアにおける研究の蓄積が、
わが国の文献に徐々に登場してきた時代であった。この間、二一編の研
究が発表されている。即ち、明治期が三本、大正期が四本、そして、村
山氏登場以前の昭和中期までが十四本である。これらの研究は、多くの
場合、ゴンザの漂流・漂着の事実また辞典編纂の事実を、「漂流史」と
か「外交関係史」とか「ロシアにおける日本語研究」といった枠組の中
で、他の項目と並列して論じていたのにすぎないが、この点、注目すべ
きは、吉町義雄氏が、ゴンザの日本語を主題にして、論文の発表や学会

報告を行っていた事実である。以下の三つの章で、こうした村山以前の
時代におけるゴンザ研究について、詳述してみたい。

二 明治期における「ゴンザ研究」

明治期のゴンザ研究としては、三点を指摘することができる。

一八八四年(明治十七)

① 外務省記録局編修「外交志稿」

一九〇二年(明治四二)

② 柄内曾次郎著「洋人日本探険年表」

③ 八杉貞利稿「十八世紀に於る露西亜の東洋語研究」

ゴンザの漂流漂着の事実が、わが国の文献に初出したのは、一八八四
年(明治十七)七月刊行の外務省記録局編修「外交志稿」においてであ
る。この書物は、「開国以来二千余年一切外国ニ関渉スル事蹟ヲ」、交聘
など八編に分けて「歴拳シ嘉永安政ノ際米船入港ヨリ延テ明治初年ニ及
ホシ三三卷附スル二年表五卷ヲ以テス」るものである。ゴンザに関する
記述は、卷之十四漂流編第三(四二〇頁)に登場する。「享保十四年
西曆一千七
百二十九年 薩摩若島丸一船風ニ逢フテ露国東察加ノ海岸ニ漂着シ土人ノ為
メニ害セラレ所左権左ノ二人僅カニ生命ヲ全フシ彼得堡ニ送ラル

て「昭和中期まで」に区分して、掘り起し、それらを、ゴンザ研究の歴史の上に位置づけてみることにした。なお、私が本稿を執筆した動機は、前記村山追悼論文の執筆中に、吉町氏の一連の研究を発見して、言い知れぬ感動を覚えたためである。

一 ゴンザ研究の歴史とその時期区分

ゴンザ研究は、ゴンザの生涯と業績に関する全面的解明をその課題とし、本格的研究は村山七郎氏をまたなければならなかった。しかし、ゴンザの死から村山七郎氏の登場までの間には、およそ二二〇年余りが経過しているの、村山以前の研究はいくつかの時期に区分することができる。即ち、ゴンザ研究は、ロシアにおける研究と日本における研究に区分することができ、しかも、後者は、更に、「明治期」「大正期」「昭和中期まで」に細分できるのである。

そもそも、ゴンザの生涯については謎の部分が多い。まず、ゴンザという名前自体が、日本語でどう表記していたのかさえ、何も判っていない。そして、彼の出身地も、また一六名の同僚と共に出帆していった港も、一切が謎に包まれているのである。こうした謎を解明する手掛りとなる薩摩側の資料は、今のところ、只の一片も発見されていない。これは、薩摩藩が徹底的に「廃仏棄釈」を実施したこと由来するものと思われる。それ故、ゴンザに関する研究は、まず、ゴンザが死んだロシア

ではじまることになった。

一七三七年、ゴンザの師で科学アカデミー図書館司書補のボグダーノフ(Богданов, А.И.)が、ゴンザの漂流漂着事情などに関する論文を二本執筆した。これは、ゴンザとその年長の同僚ソウザから行っていた聞きとりをまとめたものである。それ故、こうしたボグダーノフの作業がなければ、ゴンザは、確実に、一人の漂流民として無名のまま、歴史に埋もれていったことであろう。

その後、ボグダーノフの論文は、クラシエニンニコフ(Крашенинников, С.П.)の著書「Описание земель Камчатки」(一七七五年)とミュレル(Müller, G. F.)の著書「Sammlung Russischer Geschichte」(一七六四年)に脚注などの形で収録されて、今日に伝えられることになる。従って、今、ゴンザの生涯と業績を大筋でたどり得るのは、こうした著作に負うところが大きいのである。

両者の著作は、後に、ズギブネノフ(Сгибнев, А.)の論文「Обообщении в России японскому языку」(一八六八年)、スウェーデンの探検家ノルデンシヨルド(Nordenskiöld, N. A. E.)の著書「The voyage of the Vega round Asia and Europe」(一八八一年)、バルトルド(Бартольд, В.В.)の著書「История изчуждения Востока в Европении России」(一九一一年)、ノヴァコフスキー(Новиков-

村山七郎氏以前における

薩摩漂流民ゴンザの研究

——「外交志稿」から吉町義雄氏まで——

網屋 喜行

はじめに

昨一九九五年五月十三日、元九州大学教授の村山七郎氏が八十六歳でなくなった。氏は比較言語学を専門にしていたが、わが国におけるゴンザ研究の開拓者であり第一人者であった。そこで、本稿の目的は、村山氏以前の時代におけるゴンザ研究の掘り起しではあるが、まず、ゴンザ研究における村山氏の業績について略述しておく。

村山氏の最大の業績は、長い間歴史に埋もれていたゴンザの存在と仕事を再発見して、わが国の学界に報告したことである。一九六三年（昭和三十八）十月十一日、氏は、鹿児島大学で開かれた第十八回日本人類学会・日本民族学協会連合大会で、「ソ連に保存されている二三〇年前の薩摩方言資料」と題する報告を行ったのである。翌日、南日本新聞は、氏の報告要旨を、「世界最初の露和辞典、著者は鹿児島人、村山順天堂大教授が発表」という見出しで報じ、更に、十四日には、同氏の談話を掲

載した。こうして、ゴンザの存在と仕事が学界に明らかになった。その後、氏は、ボグダーノフなどが執筆したロシア側の文献に依拠して、ゴンザの生涯と業績を、論文・著書・講演を通じて、精力的に明らかにしてゆく。そして、一九八五年（昭和六十）、氏は、ゴンザの遺稿「新スラブ日本語辞典」の日本版を編集し、ナウカから刊行したが、これは、わが国のゴンザ研究にとって第一級の資料となっている（なお、私は、村山氏の三十有余年に亘るゴンザ研究について、昨年十二月、「薩摩漂流民ゴンザと村山七郎氏の研究——その軌跡と到達点——」と題する可成長い追悼論文を、村山氏ゆかりのナウカの季刊誌「窓」に発表した）。

さて、確かに、村山七郎氏は、わが国におけるゴンザ研究の開拓者であり第一人者であった。このことは、何人も否定することのできない事実ではある。とはいえ、ゴンザに関する研究は、決して、村山氏からはじまった訳ではなく、実は、一八八四年（明治十七）の「外交志稿」から、村山氏が登場する以前の一九五五年（昭和三十）にかけて、わが国の文献は一度ならず、ゴンザの漂流漂着の事実また辞典編纂の事実に触れていたのである。この間に、研究は徐々に積み上げられ、発表された研究は、実に二一編に達していた。^{*}とりわけ、言語学者吉町義雄氏の研究は、村山氏が一九六三年に発表した論文と、ほぼ同一の結論を示していたのである。しかし、こうした村山氏以前の研究は、村山氏の輝かしい業績の蔭で、顧みられることなく放置された儘になっている。そこで、こうした先駆的な諸研究を、三つの時期即ち「明治期」「大正期」そし